

第4回 練馬区小中一貫教育推進会議 会議要録

開催日時	平成26年6月2日(月) 午後3時～午後5時	
会場	練馬区役所本庁舎12階 教育委員会室	
出席者	委員	葉養正明、岡田行雄、坂田直哉、諸井良治、吉羽哲夫、松丸晴美、佐野匡、大瀧訓久、郡榮作(敬称略)
	協力委員	飯塚将史、福島博史、岡田孝子、矢澤義人、河西敦子、石坂恵理
	事務局	教育振興部
傍聴者	なし	
案件	<ul style="list-style-type: none"> (1) 練馬区小中一貫教育推進会議の設置・運営 (2) 練馬区小中一貫教育推進会議 2部会の検討状況 (3) 第1～3回推進会議における検討状況 (4) 定期的な乗り入れ授業実施結果 (5) 小中一貫教育実践校について (6) 特別支援教育における小中一貫教育 (7) 今後のスケジュール 	

委員長

ただいまより第4回練馬区小中一貫教育推進会議を開会いたします。
初めに、委嘱状の交付について、事務局より説明をお願いします。

事務局

(委嘱状の交付について説明)

委員長

続きまして、委員の皆様にご自己紹介をお願いします。

(自己紹介)

事務局

(欠席者 紹介)

委員長

それでは、案件の1番目「練馬区小中一貫教育推進会議の設置について」事務局から説明をお願いします。

事務局

(資料2・3 説明)

委員長

ただいまの資料2、3につきまして、何かご質問等がございましたらお願いします。、いかがでしょうか。

引き続き、会議の公開等について、お願いします。

事務局

この会議につきましては、公開を基本としています。ただし、個人情報を扱うような話題が生じた場合には非公開といたします。また、会議録についても公開ですが、委員の氏名を省略して要録という形で作成いたします。

委員長

従前と同じですが、よろしいですか。

それでは、そのように扱うようさせていただきます。

委員長

それでは、案件の(2)に移ります。「練馬区小中一貫教育推進会議 2部会の検討状況」について、事務局から説明をお願いします。

事務局

(資料4・5 説明)

委員長

部会は2つとも独立して作業をしております。膨大な作業をしておりますので、なかなか短時間の説明ではご理解いただけない面もあるかとは思いますが、何かご質問等がございましたらお願いします。

委員

資料4の最終ページの連携クリエイター研修項目(案)の中に出てくる「希望順位」とは、何の希望順位ですか。

事務局

今年度、連携クリエイターの連絡会を行った際に、クリエイターにこの一覧表を見ていただきました。そして、クリエイターの皆さんがどの項目を一番必要としているか、研修として受けてみたいかといった調査をいたしました。その集計結果です。

委員長

ほかにいかがでしょうか。

それでは、先に進めさせていただきます。案件の（３）、１回目から３回目までのこの推進会議の検討状況について、説明を事務局からお願いします。

事務局

（資料６ 説明）

委員長

昨年度の小中一貫教育推進会議においてどういう検討がなされたか今ご説明がありました。ご意見をお願いします。

案件（４）の「定期的な乗り入れ授業実施結果」に移らせていただきます。まず事務局から説明をお願いします。

事務局

（資料７・８ 説明）

委員長

それでは、この定期的な乗り入れ授業の実施結果について、少しご討議ください。

試行実施の結果を踏まえて、３点についてご意見をいただきたいと思います。１つ目は、今後、乗り入れ授業をどう進めるべきかという問題。２つ目はそのこととかかわりまして、乗り入れ授業の目的の確認。３つ目は試行実施の中で見えてきた問題点をどう改善していくかについてです。

検証アンケート結果の３ページ目に、乗り入れ授業を受けた児童の感想があります。２４年度と２５年度で対比すると、そんなに変化はありません。これをどう見るかですね。保護者の意見は４ページにあって、２４年度と２５年度でそんなに変化はありませんが、両年度とも、肯定的回答が多くなっています。６、７ページは新中学１年生のアンケート項目です。経験のあり、なしの数字を比べても、極端に違っているという感じはありません。

先生方の意見としては、９ページの下の方に、５点困難と感じる点が挙げられています。これらをどう改善するかということが次の課題になります。これについては、先生方はどうお考えでしょうか。どの項目でも結構です。

協力委員

昨年度、私は６年生の担任をしており、乗り入れ授業で中学校にお世話になりました。

アンケートの結果を見ると、児童の中１ギャップを解消することに対する効果よりも、小中間の教員の、児童の差異についての意識差を埋めることに関して、乗り入れ授業は非常に効果が高いと感じています。子どもたちにとってもプラスにはなると思いますが、それ以上に授業のスタイルに対する教員の意識差を埋めるために有効ではないかと思っています。

中学校の先生にも小学校の子どもの様子を知っていただくことで、非常に効果はあると思いますが、私は今年度算数の少人数指導を担当しており、昨年度、中学校の先生に教えていただいた単元を６年生に指導するという機会がありました。中学校の数学の先生の授業構成、例えば前の時間の学習内容を生かして次の時間にやらせるフィードバックのやり方や、中学校では

教室の移動がありますので、時間内にきちんと理解をさせて授業を終わらせることをどの先生も意識されていると思いますが、そういうところを見習って、中学校への接続を意識した授業をするようにしています。

それから、中学校での授業の1つの特徴として、数学的な考え方ができるように具体的操作の段階から、次第に数(すう)としての捉えを非常に色濃くした指導をしていくと思いますが、小学校段階の最後のところなので、授業の中でそういう力をつけていくことを意識して授業をしています。

1年間、数学の先生に6年生の授業をやっていたことで、私自身が算数の授業に関する授業改善ができていると思っています。また、中学校の先生にも、実際に小学校の子どもと接していただいたことで、私が授業を変えたことと同じことが中学の先生にもあったのではないかと思います。中学校の先生と接する機会がありますので、お話を伺ってみたいと思っています。

委員長

中学校の側からは、いかがでしょうか。

協力委員

今後の進め方、目的の確認、問題点の改善と3点挙げられておりましたが、全てが相互に関わっているのではなかなか難しいと思います。

目的として、児童だけではなく教員の資質向上という点も挙げられておりますが、確かにその辺はあると思います。私は、今年度、乗り入れて小学校6年生を教えることになったのですが、正直言うと、まだどんなふうにやったらいいか想像もつかない状況です。そういうところが学べればよいと思っています。

その一方で、全然小学校の先生と話す機会がなく、私が1回小学校のほうへ赴いて授業を見学して、ちょっと話ただけです。一言で言ってしまうと、時間がないことが課題です。

資料7の8、9ページに具体的に課題が挙げられていますが、このとおりだと感じています。具体的には、8ページに出ているように、小学校の児童に対して、週1時間程度授業をしても全く学習の連続性が足りません。やり方を改善しなければ、学習についてはそんなに大きな期待はできないかなと思います。わかりやすかったとか、中学校の様子がよくわかったとか、そういった抽象的な評価が小学校の児童から出てくるのは、当然予想されることだと思っています。

小学校と中学校では学習のルールがかなり違って、また、児童の情報も十分ではなく、授業をしていてどこまで注意していいのかわからない、こんな注意をしていいのか、いけないのかわからないというところがあります。小学校の先生も当然来ていただけるのですが、お互いの役割の確認ができていなかったという反省もあります。

今年、理科をやるのですが、実験器具が小学校と中学校とでは全くと言っていいほど違って、それを小学校から毎回運んでいただくというのが非常に効率が悪く、こういう部分については小学校へ行って授業をしたほうがいいのかと思います。ただ、中学校に来て児童が授業を受けるという意義はあると思います。しかし、中学校に小学生の実験器具を用意するとなると、お金が大変かかってしまうので、そういった難しさはあると思います。

トータルで考えてみると、空き時間がうまく合うことと、小学校からのニーズですね。

去年、小学校からは数学、体育、家庭科などで中学校に授業をしてもらえるとありがたいという話があったのですが、いろいろな事情で結局だめになり、今年は理科が行くことになりました。ただ、理科は小学校のほうに専門の教員がいてニーズはないのです。ニーズがあればすごく効果が高いと思います。小学校ではこの教科に来てもらいたい、中学校では教員の事情に支障がなく、では行きましょうということであれば、高い効果が望めると思うのですが、去年もやったから来年もやったらいいのではないかというような感覚でいったら、効果が大変落ちると思います。ニーズがうまく合って乗り入れ授業をすると効果が高いと思いますので、重要なのは、やり方の研究ということになると思います。

委員

昨年度までは2年間中学校に行って数学の先生に教えていただき、今年は、中学校で理科を教えていただくのが、本校の乗り入れです。

私自身の感覚では、まず、実際にやってみて具体的な課題が見えてくると思っています。もちろん中学校の先生と小学校の教員が話をすることとはとても意義があることだと思うのですが、それ以上に、実際に授業をしてみると、道具が足りない、運ぶ手間が要る、お金がかかるという課題が具体的に出てきます。担当教員の打ち合わせの時間がなく、どれぐらい負担がかかるかという課題も出てきます。

それから、これだけかなり労力をかけていても、その中学校への進学が非常に少ないと、目に見えるメリットみたいなものも欲しいという思いも出てきます。具体的に動いたからこそ、実感を持って課題を捉えることができたのだらうと思います。その実感を持った課題を具体的に解決していくことが、本校の連携なのではないのかと思います。

ただ、学校の中だけでは解決できない問題というのも出てきます。時間の問題とか、実験器具の問題とか、そういったところについてどんな支援をしてほしいのか具体的に出していくことがこれから先は必要なのかなと思っています。

協力委員

去年、旭丘小から旭丘中に来たのは9人です。21人のうち9人ですごく少なく、そうすると、やっぱり張り合いがなくなってしまうのではないかなと思います。学校だけでは埋められない部分が非常に大きく、この辺は大きな課題かなと思います。

委員

もう1つ付け足させてください。2年やっけていても、どういうところで子どもたちが良いと思っているのかという実感にあまり差がないという数値が出てきましたが、数字が変わってこない、やっけていく側のモチベーションが持続できないというところもあると思っています。

協力委員

上石神井中学校は、乗り入れの前からリトルティーチャー等で交流があったので、そういう面でも土壌はあったのですが、小学校と中学校とではルールが違うというのは本当にそのとおりで、やっぱり小学校と中学校ですごく文化が違うと思います。例えば体育の乗り入れも、英

語の乗り入れも、2年間やらせていただいたわけですが、小学校の授業が始まるのが8時40分、本で校は1時間目が始まるのが8時45分です。そうすると、中学の教員がちょうど朝の会ができなくなります。体育の乗り入れ授業をやっていた教員が3年の担当で、朝の会でいろいろ進路関係の連絡があったりしたので、たった週1回ではありますが、多少負担があったのかなと感じる部分はありました。

今、私は2年生を担当しており、ちょうど乗り入れ授業を2年間受けた生徒たちなのですが、生徒はとてもよかった、すごく楽しかったと言っています。英語では、中学の先生に、中学になるとこういうことをやるんだよと教えてもらったり、体育では、先生が2人いますから手とり足とり教えてもらったり、中学になったらこういうのをやるんだよと教えてもらったりして、一種の憧れみたいなものを持って授業を受けることができ、とても楽しかったと言っています。

本校では、その英語と体育で乗り入れ授業をやった教員が、2人とも1年生の担任になることができませんでした。生徒のほうからも、保護者のほうからも、せっかく知っている先生がいるので、できればその先生が学年にいてくれるとありがたかったという声が出ていました。人事の面でやむを得ない部分もあると思うのですが、そのような要望が保護者から出ていました。

上石神井小の生徒は大部分が上石神井中に来るので、そういう面ではつながりはあるのですが、文化の違いとかルールの違い、どこまで注意していいのか、生徒個々に対する情報、そういうものを十分に共有する時間等があればいいと思っています。

2年間の試行ということで乗り入れ授業は終わりましたが、これで終わりにするのではなくて、無理なく継続していこうということで、今年度は、例えば体育であれば、たまたま本校の体育の教員はバスケットが専門なので、小学校のほうからバスケットのときに来てくださいとオファーをいただければ、年に4回から5回ぐらいの範囲で行こうということになっています。英語も、何かのときにオファーがあれば行こうということでやっています。

それから、乗り入れ授業ではないのですが、今年度は研究教科が国語になっているので、国語と一緒に課題改善カリキュラムを作り、お互いに授業を見合っていこうということで取り組んでいます。

委員

豊玉第二中のグループは、これから乗り入れ授業をやるところです。今聞いていて思ったのですが、小学校のほうから子どもたちが中学校に行くときに、わざわざ中学校に行って、単発でトピックみたいな授業をやるのだったら、小学校のほうとしては、指導計画から考えると、この授業のこのあたりをやってほしいという希望があります。3ページに、いつもプリントだけだからたまにノートを使ってほしい、という感想がありました。これは、トピック的な乗り入れ授業だからなのかなというふうに私は解釈しました。

小学校からすれば、教科にもよるとは思いますが、国語のこの時間で行く、算数ならこの単元のこのところに行くという見通しの中の授業であってほしいし、また、そのために事前の打ち合わせが必要です。やればいいというのではないと思いました。それを実際にやっていくために、グループで検討をしているところです。

そういう意味では、9ページに「板書、ノート、発問を通した授業の組立」とありますが、中学校、小学校、離れてはいるけれども、教員の指導として、発問、板書、ノート、この3本

の指導は、基本としてきちんと押さえていくように、共通の約束をできるだけ検討していく必要はあると思います。

それからもう1点、生活指導の観点が違うということをよく言いますが、今、本校のグループでは、生活指導と学習ルールといった点については、できるだけ共通にやっていくようにして、中学校に行ったときに困らないように、小学校でもこの辺はできないかというようなことを検討しています。挨拶をするにしても、言葉を先に言って、後で礼をするというような形で共通でやっていこうとか、授業の始まりの号令のかけ方など、まだそこまで詰めてはいませんが、学習規律をそろえるということで、できる場所はあるのではないかと考えて取り組む方向で今検討しています。

既にやっているところについて、これから頻度を高くしていくのであれば、今言った授業にしても生活指導にしても、小中で違うというのであきらめるのではなくて、違うところをどこまで共通して詰めていくか、やはり検討していかなければいけないし、10のうち1つでも2つでも方向を詰めていかなければいけないのではないかと考えています。

協力委員

本校では乗り入れ授業はやっていなかったのですが、中学校の先生が旭丘小のほうには行っているということで、中学校の先生とどういふふうに関連しているのかすごく興味もあつたし、校内研究が算数というもあつて、そういうところにも気を付けて研究していくことができました。

今回、乗り入れ授業をすることによって、いろいろな意味でやってみてわかつたことがかなり多いと思います。練馬区としては、これから小中一貫教育を進めていくわけですから、必ず通らなければいけない課題であり、今回乗り入れ授業をやることによって、その学校の先生たちは実感を持って、課題や成果を得ることができたと思います。乗り入れ授業というのは、ある意味、やっていかなければいけないことだと思つています。文化の違いを乗り越えなければいけないのではないのでしょうか。小学校と中学校の文化の違い、それからいろいろな意味での違いです。そして、授業の仕方、組み立て方など、さらに先生方も工夫していかなければいけないと思つています。乗り入れ授業でそういう課題が見えてきたのではないのでしょうか。

では、この課題をこれからどうしていけばいいのか、2年間で終わりではなくて、続けていくべきだと思つています。小中一貫教育をこれからも進めていくのであれば、何が足りないのかを明確にして、それを解決するために、どういふ手立てが必要なのかを話し合うのがこの場だと思つています。そういう意味でも、課題、成果、それぞれかなり明確になってきていると思つています。

例えば6年担任の先生はわかつても、ほかの先生たちにはどんな様子だったかがなかなか伝わっていないように思つています。中学校の場合もそうだと思つています。乗り入れ授業を担当した先生は、実感を伴つて小学校と随分違うのだなとわかつたと思つています。2年間やっていく中で、中学校の先生と話して、数学の先生の算数の教え方が大分工夫されているというのもわかつてきました。それをほかの先生方にも広げていく必要があると思つています。そういう意味でも、乗り入れ授業というのは、すごく成果のあつたことだと思つています。

副委員長

せっかく小中連携をやっていたのに、ほかの中学校に行つてしまつているということについ

て、どう考えたらいいかということですが、資料の7ページで、小学校の子どもたちが中学校で授業を受けたときに、小学校は同じことを繰り返すけれども、中学校では2、3回でもう終わって先に進んでいってしまうことや黒板に書くスピードなど、これは特定の小学校と中学校の子どもということではなくて、多分日本全国の小学生が中学校に行き、感じていることだと思います。

小と中の連携や、乗り入れの授業をやるのが、小学校の子どもにとっては中学校を知るすごくいい機会なので、その子たちが、例えばほかの学校に行ったりしても、練馬区の子もですから、練馬区の小学校の子もたちのこういう感想に見られるしんどさをどこかで救ってあげられたのだろうなと思います。ですから、積極的にこういう乗り入れ授業を取り入れ、小学校の子どもたちに、中学ではこういう生活が待っているのだということを知らせてあげるといいか、経験させてあげるといいことが、非常に大事だと思います。

そのために、指導方法とか指導内容の工夫が必要になります。中学校はあまりに速くやり過ぎるので、子供がそこでギャップを感じています。児童観と生徒観が違うわけです。このギャップを中学校の1年の段階で何とか緩やかに接続してあげよう、研究が中1ギャップを防ぐ大変大きな観点になると思います。

ですから、大変だとは思いますが、小と中をつないでいくという取組を積極的にこれからも工夫をしながらどんどんやっていくことがとても大切なことだと思います。

委員長

たくさんご意見をいただきましたので、事務局で整理していただいて、乗り入れ授業報告の中に反映させていただくということではいかがでしょうか。推進会議は、これからあと2回ぐらいございますので、またこの問題が出てくる可能性はありますが、とりあえず今日のところはそのような方向とさせていただきます。

案件の(5)小中一貫教育実践校について。事務局から説明をお願いします。

事務局

(資料9・10 説明)

委員長

資料9では、小中一貫教育実践校と小中一貫教育連携校という2つの区分の中で、教育課程の個所、目指す児童・生徒像のところは白抜きになっております。実践校と連携校の違いについて先生方にご意見をいただきたいと思っております。

昨年度の会議では、小中一貫教育実践校のイメージがわかりにくいというご意見があったような記憶があります。小中一貫教育連携校と実践校という区分が立ててあって、兼務発令のところは、「あり」「なし」と分かれているし、課題改善カリキュラムにも違いがあります。目指す児童・生徒像、教育課程、教育目標、指導の重点、特色ある学校づくり、この辺りはどういう見方ができるのでしょうか。すぐには解決できないと思っておりますが、よろしくをお願いします。

協力委員

施設分離型小中一貫教育校であれば、教育課程届における共通性も、教育目標も、指導の重

点も、特色ある学校づくりも、目指す児童・生徒像のほうも、全部1つにしていくべきだと思います。ところが、実践校というのは今どうしていいかわかりません。3校なり2校なりで、ある程度は共通できる部分を作って、こういう具体的な取組をしていきましょう、指導の重点の中に取り入れていきましょうという形にならざるを得ないとは思いますが、そのあとはどうなっていくのかというところが、わかりません。

ですから、例えば施設分離型の一貫校になるのであれば、指導の重点であっても、教育目標であっても、そういう見通しをもって作っていく必要があると思います。例えば3年なり、5年なり、計画的にそういう方向に進んでいくということが見えていけば、そのために具体的に、1年目は何をしよう、2年目は何をしようということもできると思うのですが、それがわからないで、ただ単に実践校と言われても、例えば10年も20年も経てば、ビジョンがあったとしても、だんだんかすんでいくような気がします。

我々教員というのはいつまでもその学校にいられるわけではありませんので、なおさらビジョンがはっきりしていないと、次第に薄くなって消えていくように思います。そういう意味でも中途半端だなというのが今一番感じていることです。

事務局

今どうするかという話と、将来どうあるべきかという話と2本立てで考える必要があると思います。

将来につきましては、教育委員会としてもしっかり考えていく必要がありますが、現時点でお感じになっていることを忌憚なくおっしゃっていただきたいと思います。それを事務局としてはしっかり受け止めて、今後の検討の材料にしていきたいと思っております。

一方で、平成29年度には全校が実践校になるという状況もありますので、直近の学校の取組はどうあるべきかという課題もあります。短期的な部分、中長期的な部分、両面について、皆さまのご意見をいただけたらと思っております。

委員

今年26年度の教育課程届を出すときに、豊玉第二中と豊玉第二小、豊玉東小の3校で、学校の教育目標のところに、小中一貫教育に関して3校が協力するのだから、今回は3校で9年間で目指す人間像について入れませんかという話になりました。そこで、3校で作っているリーフレットの知・徳・体に当たる個所に、小学校のほうは中学校へ送り出す側として、その人間像を目指す形で知・徳・体を入れてやっていきましょう、豊玉第二小のほうも、それでやっていきましょうということで入れました。中学校のほうは、小学校からの子どもたちを受け入れる形で、9年間のうちの最後の3年間を作り上げるという形で、3校共通の言葉を入れて、それを目指してやっていくという形でリーフレットを出しました。

完全に全部できるかどうかはわかりませんが、小中一貫教育の9年間のうち6年間を小学校が持ち、3年間を中学校が持つという役割分担で、小学校はその6年間でこのところをやっていきます。中学校のほうもそれを受けて、3年間ということで、共通のキーワードとして入れていけると思います。

細かく教育目標、重点、学校づくりまで共通する形では書き込んでいませんが、最後の目指す児童・生徒像を、ここが「目指す人間像」という形で、共通して入れることはできます。そ

れでやっています。

委員長

資料10では、研究グループや実践校の状況を6パターン程度に分けています。こういうパターンの分け方が適切か、あるいはパターンごとの小中一貫教育の進め方をどうしたらいいかということについて、自由にご意見をいただければと思います。

くり方をうまく設定すると、将来的にはもうちょっとわかりやすく進むようになっていくのではないと思うのですが、今のところは非常に複雑という感じがします。

5月27日に経済財政諮問会議があって、教育がテーマになっていました。ニュース等で流れましたのでご存じだと思うのですが、いずれ適正配置問題というのが出てきます。秋口に文科省が、児童・生徒数がこのレベルであれば統合を進めるといった参考意見のようなものを出すようです。

練馬の学校は練馬区が学校設置条例を作っているわけですから、その適正配置問題というのは練馬区の問題ですが、国として何もしないでいいというわけにはいきません。人口減少社会に移ってきていますし、国債発行残高の問題もあるので、財政的にはかなりきつくなってきています。

そうすると、こういう学校規模の小中の組み合わせなども絡めながら、学校の適正配置をどのようにしていくのかということと連動させて考えていく必要があると思います。将来的には現行の学校でいくのかどうか分からないので、有識者会議の提言などがどのようにしていくのかを含め、かなり難しい問題のような気がします。

児童・生徒数の減傾向に比して小・中学校数は減少していません。義務教育施設の建て替え経費がなくなってきている中で、第二次ベビーブームのときの学校改築部分がちょうど建て替え時期にきていて、国では学校施設費の2分の1を補助していますが、原資がだんだんなくなってきています。ですから、校数を圧縮しないと日本全体がもたない、という状況もあるわけです。文科省は、教員数にしても、そんなに著しく減らしたいとは思っていないと思うのですが、経済界も、財務省も、非常に危機感を持っています。高度なシミュレーションをやっていかないとわからないところもあるし、最後は議会との関係もあります。

パターン分けというか、こういう問題について少しご意見をいただければと思います。

世田谷はブロック化していますし、北区は、ファミリー構想というグループ化です。みんないろいろ模索はしているのですが、さて、練馬はどうするかという問題です。練馬は大所帯だから結構難しいと思います。

小中一貫教育を全区展開するという方向で一生懸命やっているのですが、とにかく大きな区なので、全区で実施する際には、何かエリアの設定を考えなくても対応できるのかという問題ではないかと思っています。

委員

今日初めて参加させていただいて、まだなかなかわからないことが多いのですが、中学校の場合は選択制を導入しているのだから、先生側としては、一生懸命やっているのだけれども、子どもたちは違う中学校に行ってしまうことがあります。先ほど副委員長のおっしゃっていた、たとえ違う中学校に行ったとしても、中学校の授業を早目に経験したことで、子どもたちの勉強にはつながるのだ、体験することがいいことなのだと考えると、小中一貫教育を、どのように

持っていけばいいのか、先生の意識向上というのもあるでしょうし、子どもたちが選択するときの1つの要素にもなるということを考えると、やっぱり推進していくべきなのかなと思います。

あとは、どうしてもどんどん生徒数が少なくなることから、学校を集約するということもあると思うので、その都度、いろいろな視点で小中一貫教育を考えていかななくてはいけないのかなと感じました。

委員

難しい課題に真剣に取り組んでいただいて、本当にありがとうございます。保護者の立場からすると、子どもに願うことは、当たり前ですけども幸せになってほしいということです。幸せな家庭を築いてほしい、ちゃんとした親になっていい社会をつくってほしい、それを持続してほしいというのが一般的な親の漠然とした願いだろうと思います。

そういうふうにと考えると、自分が育てられて、次は子どもを育てていくという1サイクル分できるようにすることが教育であり、それは家庭の役割でもあるのですが、小・中・高といった学校教育もとても重要な役割を担っていると思っています。少子化で兄弟が少なくなっている中で、家庭で教えられないことをどうしても学校に頼らざるを得ない部分が、次第に増えてきているということも間違いのないことです。PTAの立場としては、学校側に兄弟に代わる子供同士の横の関係とか、近い上下の関係が体験できるようにお願いするかわりに、先生でなくてもできることは保護者が引き受けるという形で、円滑にやっていけるように変えていかなければいけないと考えています。

今までのお話の中では、知・徳・体のうち、徳というところがなかなか取り上げられていませんが、徳というのは、持続可能な社会を作るためにはとても大事なことだと思います。教科ではないので、やはり取り上げにくいのかなと思いますが、そういう面はとても大事だし、大きな意味があることだと感じています。先ほどの「目指す人間像」というところが、やはりとても大事なところだと思っています。「目指す人間像」に対して、小学校、中学校の9年間で一体どういうところまで持っていけばいいのかが見えてくれば、何が大事で何が大事ではないという優先度も、少しは整理されるのかもしれないと思っています。

あまりにも膨大なので、目指す目標がある程度同じ方向に向かわないと、まとまるのが大変なのだろうなと感じています。小・中9年間を通して子どもが一貫した教育が受けられるとしたら保護者としてはとてもありがたいことです。これはぜひとも進めていただきたいし、それに対して、保護者というかPTAとしても何ができるのか、これから一緒に模索しながら協力させていただきたいと考えています。

副委員長

資料9の一番下の目指す児童・生徒像のことなのですが、先ほど校長先生からもお話がありました。学校にはそれぞれの教育目標があって、なかなか変えられないわけですが、この目指す児童・生徒像、目指す人間像がはっきりしていれば、例えば3校なら3校が一緒になって、こういう子どもを作ろうと考える際に、その大きな柱を作りやすいのではないかと思います。それを明らかにした上で、小学校で何をやり、中学校で何をやるのか考えられると思います。方法が違って、目指すところが同じという、そういうカリキュラムができればいいと思って

聞いていました。

委員長

巨大な区なので全体像を見渡すのが非常に難儀という感じがします。考えるやり方として、5つの区が一緒になったような区として見たり、エリアである程度分けて考えるという可能性はあるのでしょうか。5つか6つぐらいに分けられるのであれば、その中で一貫校の組み合わせを考えていくと考えやすくなるように感じます。そういうことも含めてご意見をお願いします。

委員

去年の推進会議にも出させていただきましたが、そのとき在籍した中学校は研究グループにも、実践校にもなっていませんでした。今年異動した先の中学校も、そういう学校です。今年度は部活動の見学しかやっておらず、先ほどから出ている乗り入れ授業はまず無理なので、出前事業と、児童会、生徒会の交流事業から新しくやっっていこうかなと思っています。

資料10を見ながら考えていたのですが、一番下に石神井西中学校がありますが、この学校は区内で2番目に大きい中学校で、学区域の中に小学校が3校あります。この学校間の距離が、資料では近接、分離、分離となっていますが、石神井西小学校は青梅街道を渡った向こうなのでこれは分離で、立野小は門から門までがとても近いのでこちらが近接、ちょっとここは入れ替えかなと思います。

例えば三原台中学校や大泉中学校は、3校ある小学校のうちの1校とだけ一貫教育の研究を進めていますが、小学校3校とも同じように進めていかないと、中学校に入ってきたときに、子供にとって出身校の違いが影響するのではないのでしょうか。先ほどから出ている小中一貫教育の狙いである中1ギャップの解消であるとか、小学校の文化と中学校の文化の理解というのはどの学校とやっても理解できるのではないかと思うのですが、子どもという視点で考えると、1校だけでどういう成果が上がっているのか、いい点と課題は何かについて聞きながら、来年度どうするか考えていきたいと思っていたところです。

先ほどブロックでという話がありましたが、校長会は、練馬の場合は4つのブロック分かれています。私はDブロックに所属しているのですが、Dブロックの中で実態を見てみますと、私の学校は、どちらかという武蔵野市に近く、保護者の意識や生活圏が、どちらかという武蔵野市なのです。ですから、同じDブロックの中で共有して何かできるかという、少し疑問があります。逆に去年まで所属していたAブロックは、何となくできそうな感じもします。

ですから、校長会のブロックを崩して、地域で分けるということであれば、その地域だけでということもできるかもしれません。確かに34校区あって、34校区全部で何か共通したものとか、練馬区バージョンのようなものを作るのは、中学校の中でも状況がばらばらなので難しいと思います。ブロックの中で考えることはやりやすいとも考えられなくはないのですが、いろいろ課題もあると思います。

先ほど乗り入れ授業で議論になっていたのですが、中学校の教員が小学校に行って授業をやることによって、子どもの評判はもちろんいいのですが、それぞれの教員同士のお互いの異校種の理解であるとか、授業改善につながっているということがありました。それは私もいいなと思います。逆に、小学校の先生が中学生に授業をすることで、中学校ではこういうふうに関

展していくのだということが理解でき、では、小学校でここはこういうふうに授業をしておかなくてはというような逆の理解にもつながるのではないかと、お話を聞いていて思いました。来年度研究グループになりますが、その際には、小学校の校長先生方とも相談をして、研究でするので、いろいろやってみたいと考えていたところです。

委員

三原台中学校ですが、目の前に泉新小があり、2年間2校で研究に取り組みました。その後、泉新小だけではなく、橋戸小学校と光和小学校を合わせた3つの小学校に広げて取り組んでいます。

しかし、今年は橋戸小と光和小の校長先生と副校長先生、クリエイターが全部異動してしまい、ちょっと残念でした。昨年度に校長、副校長がかわり、今年度はクリエイターがまたかわってしまったので、ゼロからのスタートになりました。とにかく管理職の共通認識がないと動かないと思います。

泉新小とは、カリキュラムを算数、数学と、体育、保健体育で作りましたが、たった2年間では検証できませんから、持久力がどう上がっているか、算数、数学の力がどうやって伸びていくのか、算数嫌いを作らないためにはどうするか、今年度泉新小学校の校長先生はおかわりになりましたが、そういうことを継続的に見ていきたいと思いますという認識を共有しています。

昨年度、橋戸小学校もその考えに賛成してくれて、橋戸小の算数の研究授業を本校の数学の教員が見に行きましたが、小学校の校内研究とうまくタイアップすると思います。小学校は、全部の教員が算数を教えることができ、理科を教えることができるので、中学校の専任の教員が校内研究に参加するとアドバイスもできて感謝されたり、逆に理科なり数学の教員が小学校の丁寧な授業に感動して帰ってきたりするので授業力はアップします。本校で言えば、小中連携して、授業力はアップしたと思います。小学校はこうやって丁寧にやっているのだ、こうやって丁寧に板書しているのだ、授業はスピードアップでやらなければいけないとしてももっと丁寧にやらなければいけないと気付いて、中学校の教員では、授業力は向上したと私は解釈しています。

今年、光和小が道徳をメインで研究しています。本校も、道徳の教科化を見据えて、今年度の強化ポイントとして道徳の授業力向上を校内研究のメインにしているので、お互いに道徳を話し合っていないかと提案すると、光和小とは道徳の部分で交流ができていくのかなと思っています。泉新小と橋戸小とは研究のメインは別ですが、違っていても、交流しやすい部分でやっていけるのではないのかなと今計画しています。

私は台東区に住んでいて、自分の子どもの小学校のPTAもやっていたのですが、できれば練馬区も小学校を削ってもらいたくないと思います。この会議にもPTA会長さんがいらっしやいますが、PTA活動をしている人たちが、いずれ町内の役員ではないですけども、町を作っていく方たちになります。台東区は子どもがいないので、中学校はどんどん少なくなってきました。狭い区なので、好きな学校に全部行けるのです。ですから、正直言って、町はだんだん廃れてきてしまって、町会はもう老人会みたいなものになっています。唯一お祭りで盛り上がっているだけで、地元の交流はほとんどなくなって、町がだんだん廃れてきてしまっています。小学校のPTAが中学校のPTAになり、外から来た人たちも、我が子のためにいろいろ学校と交流しながら地域でボランティアをやることで、それが町の人になって、それで町を作

っていく。学校の自由選択が進み学校をなくしてしまうと、地域にその力がなくなってきてしまいます。私が住んでいる台東区で、統廃合とか自由選択で町の力がなくなっていくのを自分自身で経験しているので、ちょっとずれてしまいましたが、感じたことを発言させていただきました。

協力委員

私は、24年、25年度と、教育課題研究校という形で、中学校とはかなり距離があり、24年度は本校から7%しか進学をしていないというような状況の中で、中学校に行きましたところ、校内研究が中学校でもあるのだなと率直に思いました。中学校では皆さんやっていないですよというようなことをまず言われ、そういうものなのかなと思いつつも、一緒に研究の発表会も2年後にはしますから、仲良くやっていきましょうというところからスタートしました。

中学校の先生は教科の専門性の高いご発言が多いものですから、最初、小学校の教員は何もわかっていないような感じでちょっと引いていました。そこで、突破口を作ろうということで、私も少人数の算数を担当しておりますので、数学の先生とまず仲良くなろうということで、しょっちゅう会うようにいたしました。小学校といえども校内の授業で、教科と領域をあわせて全部で6つの分科会をしたものですから、普通は1年間ずつしか担当できません。たまたま私は2年間できたので、その2年間で数学の先生とすごくいい関係ができました。住まいが近かったり、通勤経路が同じだったりしたので、ホームでお会いしたときも毎日5分でもお話をしました。もちろん児童の個人情報には触れないようにしましたが、小学校の授業を見に来ていただくことについても、中学校は時間割が全て決まっていますので一切自由がなく、中学の先生から小学校は自由だとか、暇があるからやっているだとか言われて、小学校では怒ってしまう先生がたくさんいたのですが、楽しい研究ができるように、まず私たちが半分ずつでもいいから授業を見に行こうと話をし、教員で担当して授業を見させていただきました。

先ほどから出ている、学習の連携でいうと、例えば円についての学習は小学校では少ししかないのですが、コンパスを使った円の指導に当たって、中学校では円よりも弧が大事だとか、弧は円の一部という考え方をもちなさいとか、コンパスにはディバイダーとしての役割もあるのだとか、細かくたくさん教えていただきました。小学校では、コンパスを使って円の模様をかいていけばいいという感覚から、それらを見据えて教えられるようになったほど気付くことがありました。どこでもいいから突破口があれば連携をしていけます。「距離あり」とか書かれています。私は、距離がないようにという気持ちでやってまいりました。

本校からはほんの少ししか生徒が行っていないのですが、私たちが中学校へ行くと、生徒たちが私たちをすごく受け入れてくれて、しょっちゅう行くものですから、もう小学校だか中学校だかわからないような感じにもなっています。実践校になって、6月の校區別協議会のときにもリトルティーチャーを自然な形で協力授業に組み込めるのです。やっつけて大変なことは例えば外国語活動で中学校の先生に来ていただいても、それは35時間の中で扱うのではなく余剰でやりなさいというような細かいカリキュラム上の位置付けの問題とか、生活科の中でリトルティーチャーをと思っても、生活科の狙いからはずれているのではないかという問題があることです。中学校は全員かわられないので学校行事としてしかできないとか、特活でやりましようとかいろいろ言っても、教科、領域それぞれの目当てがあり、非常に難しい中でやめてしまうことは簡単ですが、やりたいという気持ちがあいてくるような連携をとっていくことがと

でも大事だと、実践した者としては思っています。

これまでにどれだけの成果が上がったかはわかりませんが、教員は異動があるので、今年も代わってしまったメンバーでリトルティーチャーをやります。作り上げてきたものがあるのでそれを参考にして、やらない方向ではなく、やっといこうという方向ができています。連携を深めるに当たっては、教育指導課の先生方の講演とか、統括指導主事が毎回来てくださることとか、指導課長が温かい対応をしてくださることなど、学校との1つ1つの連携があつてこそ進むものかなと思います。

詳しいことや難しいことは全くわかりませんが、お互いに仲良くなれたことがすごく財産で、今も結構仲良く活動しています。

協力委員

地域に支えられているということと道徳の件の2点についてお話ししたいと思います。先ほど本校のPTA会長のお話がありましたが、開三中は非常に地域に支えられており、24日に体育祭がありました。会長さんはそのことで非常にあちこちを奔走してくださいました。その後の地域のナイトバザールでは、たまたま体育祭の日だったので本校の生徒は参加していませんが、例年ですと、そのバザールをお手伝いする形で中学生が参加して、いろいろ地域の仕事を手伝わせていただく中で地域の方とも交流しますし、小さい子どもたちを相手にゲームをさせたりして、小学校に入らなくても十分に小さい子どもたちとつながりが持てるようにしてくださっています。とにかく長い間の歴史の中で地域に支えていただいていると強く感じています。

もう1点の道徳のほうですが、3年前、開三小が道徳で研究をやる、開三中も道徳でやるとわかりましたので、ではお互いに連携しましょうということが校長のサイドであり、連携して研究をやらせていただきました。私もやってよかったなという感想を持っています。小学校の道徳はすごく盛んで、力がおありなので、授業を見せていただくだけでも考になりました。講演会も小・中の両方の講師の話をお互いに聞かせていただく中で、小学校というのはこういう視点で道徳を指導されているのだなということがわかりました。中学校は精神年齢も変わっていきますので、小学校の指導を参考にはしても同じではないというようなことなど、非常に多くのことを学びました。

課題は、授業を見せていただくときに、5時間目に行くと、我々の6時間目の授業がつぶれてしまうことです。授業時数の確保が言われているので、そこが泣きどころかなと思います。幾つか問題点はあるとは思いますが、教員同士が仲良くなれるというのは同じだと思います。入学してきた子どもたちに道徳についてのアンケートをつい最近とりました。小学校での指導が生かされて、道徳はとても大切だと思うパーセンテージが、2年前よりも非常に増えています。思うように発言ができないというのはまだ多いので、それをどう改善していくかということが我々の課題なのかなと考えるので、取組の結果を見ていきたいと思っています。

委員長

6番目の特別支援教育における小中一貫教育、これは次回に先送りさせていただきます。

7番目の今後のスケジュールという箇所に移ります。事務局から説明をお願いします。

事務局

(資料 13 説明)

委員長

周囲の状況がかなり慌ただしくなってきました。経済財政諮問会議は、かなりインパクトがあるのではないかと思うのですが、適正配置問題は、来年度あたりから相当動くというように文部科学省筋から聞いています。秋口に文部科学省が、このレベルだと統合を強く推進するか、これは統合を検討すべきだとか出してきても、それを受けるのは市区町村のほうなので、どうされるかは市区町村次第ということですが、国としてそういうのを出す方向になっているので、それが秋口に出て、きっと来年度予算に盛り込むことになるかもしれません。

教育再生実行会議は6・3制改革の審議をやっていますが、学校教育法第1条の小学校、中学校に並んで義務教育学校というのが入り込む可能性があります。あとは練馬区として義務教育学校を作るのか、それとも小・中学校だけでやるのかという制度問題が出てくる可能性があります。そうすると、義務教育学校というのはそれ自体が一貫校ですから、施設分離型で義務教育学校にする場合もあるかもしれません。

ですから、この委員会でやっていることは、非常に大きな重みを持つ可能性があります。特に練馬区は相当前から取り組んでおられるので、その出し方によっては、モデル地区として全国から非常に注目を集める可能性があります。練馬区には、多士済々の先生方がおられるし、PTA会長さんもおられます。いろいろな方がおられるので、これから先もいいものを作っていけるかと思います。ぜひご協力をお願いいたします。

(閉 会)